

世界3の自律性は言語的実体と衝突するのか

Does the Autonomy of World 3 Conflict with Linguistic Entities?

池田健人

Abstract

The world 3 theory, which Sir Karl Popper put forward in his later years, provoked a great storm of controversy. The most heated criticism has, among other things, focused on his argument for the autonomy of world 3. In this paper, I will first review the dispute concerning the reducibility of world 3 to the other two worlds and the conception of autonomy. Secondly, I will introduce the ontological analysis of the inmates of the three worlds.

Finally, I will suggest the importance of language for world 3.

(1) 研究テーマ

世界3の自律性と世界3における言語的実体の措定はポパーの三世界論においてどのようにして共に維持されるのだろうか。このことについて存在論の観点から考えていくため、その第一歩として本稿では言語の世界を新たに想定する議論がポパーの世界3概念に齟齬を来すということを明らかにする。

(2) 研究の背景・先行研究

不明瞭な直観としてではあるが長いあいだポパー哲学を根底から支え続けていた世界3概念は、その晩年、三世界論として公表された。三世界論とは、物理的対象ないし状態の世界（世界1）、意識の状態または心的状態、行動性向の世界（世界2）、そして思考の客観的内容の世界（世界3）という少なくとも3つの部分世界が存在論的に区別されうるとする議論である。これら3つの世界は、世界2の仲介によって相互作用することができる。

とりわけ、ポパー哲学の本質をなす世界3概念に対してはじつに多くの批判がある（Niiniluoto 2006: 59; Boyd 2016: 222, 230）。そのなかでも、もっとも厳しい批判にさらされている問題のひとつが世界3の自律性(autonomy)にかんするポパーの主張である（Gilroy 1985: 197）。

たとえば、ガデンヌ（Gadenne 2016）は物的一元論の立場から世界3の自律性を批判した。なぜなら、世界3が世界1に還元されうらば、その自律性は否定されるからだ。ポパーは、文明の再建における書物の重要性を指摘することによって、自律的な世界3の存在を示唆した（Popper 1972:

107-8)。しかし、ガデンヌによると、書物が世界に対して非常に大きな影響力をもつという帰結こそ妥当なものであるが、その事実を根拠として自律的な世界3の存在を主張することはできない。なぜなら、そのことによって私たちが結論できることは、たんに書物はある特殊な状況において世界の進行にかんして決定的な役割を演じることができるという事実のみだからである。ガデンヌによると、書物は明らかに世界1に属していて、結局のところ、私たちの世界は物理的なものによって著しく改変させられる。

また、世界3を世界2に還元しようとする議論もあるⁱ。パルスニコバ (Parusniková 2016) は認識主体の重要性を強調することによって世界3の自律性を批判した。問題とは私たちによって見つけられることを待っているようなものではなく、私たちの好奇心によって生命にもたらされるものである。いかなる認識主体ないし把握する精神も存在しないならば、同様にいかなる理論や問題もまた存在しないだろう。書物それ自体が背後に隠された可能的な理論や問題などを保有しているのではなく、それらの可能性は読者の可能性に依存している。

こうした批判に対して、どのように応答することができるだろうか。まず、物理世界は書物などのかたちで理論を取り込んだ物的なものによって変更されるというガデンヌの主張に対しては、その変化を生み出したのは書物の物的な側面ではなく、書物が理論それ自体を負っているという事実であるということによって反論ができる。では、物理世界は理論それ自体ではなく、それらについての私たちの理解によって変更されるというパルスニコバの主張についてはどうだろうか。ポパーはこの種類の批判を重要であると認めている。というのも、世界1と世界3は媒介者としての世界2を通じてのみ相互作用が可能であり、理論それ自体による物理世界の変更にとって世界2の関与は不可欠だからである (Popper 1972: 148-9, 155; 1992: 184-5)。それゆえ、本節の残りでは、この問題について詳しく論じよう。

ポパーによると、世界3の対象は思考過程の内部において捉えられたものである (Popper 1972: 298-9)。ここで、そのことをわかりやすくするために、世界3の対象を可知的対象、そしてそれを捉えるまでの筋道を心的過程と呼ぶことにしよう。そうすると、ポパーは、思考過程の内部において可知的対象と心的過程を区別していたということができる。しかし、たとえそのような区別が導入されるとしても、それらはどちらも思考過程であるという点において違いはないのだから、パルスニコバにとっては、そこにはたんに2つの異なる世界2の対象があるだけのことにすぎないかもしれない。そこで、次のような例について考えてみよう。たとえば、いま私がよく知ってい

ある絵画について思い浮かべるとき、その思考過程、それゆえ可知的対象と心的過程の両者は明らかに精神世界に属するとパルスニコバは主張する。たしかに、パルスニコバのいうように、心的過程の結果として思い浮かべられた絵画、すなわち可知的対象もまた精神世界に属するものの一部であるということに変わりはない (Popper 1992: 181-2)。ところが、ポパーによると、心的過程の結果としての可知的対象は、精神世界に属する思考過程の一部であるにもかかわらず、それでも世界 3 に分類されなければならない。なぜなら、それは心的過程とは違い、さまざまな面からの批判的検討が可能なものだからである (Popper 1992: 181-2)。可知的対象は心的なものでありながら、同時に客観的なものでもある。パルスニコバが主張するように、これら両方が同じように精神世界に分類されるのならば、この点について明瞭な説明を与えることができないⁱⁱ。

このように、ポパーにとって、心的過程とその結果としての可知的対象は区別されるべきものであるということがわかった。それでは、次に、ポパーはいったいどのような意味で思考過程のうちでもとくに可知的対象に自律的な地位を与えたのだろうか。以下では、そのことを考えるために、世界 3 のさらに細分化された概念である世界 3.1、世界 3.2、世界 3.3 についてみていこう。

世界 3.1 とは、世界 1 のかたちで具体化ないし保存された世界 3 の部分である。たとえば、書物や芸術作品はもちろん、図書館や、人間の脳において記憶を司る領野などがこの世界に含まれる。世界 3.2 とは、いくらかの人間によって把握ないし理解された世界 3 の部分である。そして、爾余の領域が世界 3.3 ということになる。世界 3.3 とは、世界 1 として現実化されておらず、また世界 2 によっても意識的には捉えられていないような理論や問題ⁱⁱⁱ、あるいは将来的解決までをも含む世界 3 の部分のことを指す。この世界の存在者^{iv}は、以前にはいかなる主観によっても知られていることはない。またひょっとすると、それらは永遠に認識されることもないかもしれない。ポパーは、この世界をとくに影世界 (shadow world) と呼ぶ (Popper 1974: 1050-2; Popper & Eccles 1977: 41-3)。この世界 3.3 が、世界 3 の自律性を考えるうえで重要となる。

幾何学について考えてみよう。たとえば、たんなる直線や円、直角などは人間精神によって考案されたものである。しかし、たんなる直線や円、直角のみがあることと、直径に対する円周角が直角になること (タレスの定理) は同じではない。前者は発明されるものであり、後者は発見されるものである。幾何模様が私たちによって発明されたとき、タレスの定理もまた同時に

誕生した。しかしそのとき、人間精神によって捉えられ、世界 3.1 と世界 3.2 の両方に属することができたのは、あくまで直線や円、直角などの個別的な幾何模様のみである。タレスの定理は、依然として世界 3.3 に存在していて、のちにタレスによって—おそらくはタレス以前の誰かによって—発見されることとなった (Popper 1994: 26)。世界 3 はひとたび発明されると、その瞬間からひとり立ちをして、独自の生を歩み始める。

以上により、ポパーが世界 3 の自律性ということは何を意味していたのかは明らかとなった。ポパーは、私たちの制御を超えて世界 3 に潜むような対象、すなわち意図されざる結果 (世界 3.3 の存在者) を指して自律的な産物と呼び、またそのような対象が生じうる世界 3 の性質を自律性という言葉によって表現した。

しかし、ギルロイ (Gilroy 1985) によれば、ポパーによるこのような世界 3 の自律性の主張は、そこに必然的に含まれる不合理な帰結によって深刻に損なわれる (cf. Cohen 1980: 177; O'Hear 1980: 196–7)。たとえば、世界 3 がポパーのいうようなものであるとするならば、私たちが入手しうるあらゆる知識は、人間精神によって最初の矛盾が産出されたとき、自律的に派生したということになるのだろうか。なぜなら、ポパーは自己矛盾を抱えた理論もまた世界 3 に属すると主張するとともに、その真偽にかかわらず、あらゆる命題は矛盾から得られるということをも認めるからである (Popper 1963: 317–9; 1972: 126, 297; Popper & Eccles 1977: 56–7)。ほかにも、具体的に言及される論理法則には一貫性や含意、両立性、否定などを挙げることができる (Popper 1963: 298; 1972: 297–9; 1992: 180; Gilroy 1985: 187, 199)。ポパーの世界 3 において、ある命題から演繹ないし推論されるすべての論理的帰結は、その命題が生成されるやいなや自律的に生じる。ところが、このような事態は常識に反するのではないだろうか。

このような批判に対して、ニーニルオト (Niiniluoto 2006) は、ギルロイの議論においては自律的な世界 3 の構造が正しく考察されていないと指摘する。ある完全な言語 \mathcal{L} におけるあらゆる文の集合を仮定しよう。ここで、その言語によって定式化されるある一貫性のない理論を導入すると、そのとき、その理論の論理的帰結の集合はその言語において構成されるすべての文の集合と等しい。世界 3 をたんに可能的な文の集合であると考えれば、あらゆる命題はすでに世界 3 にあったのであり、その意味で世界 3 には何も新しいものは加えられないといえることができる。このように、ニーニルオトはギルロイの見解を認めつつも、ある命題が断言されないかぎり、非統一的な世界 3 における命題の集合が問題を引き起こすことはないことを主張する。なぜなら、

知識一般は断定された命題の全体、提出はされたがまだ反証のされていない命題の部類、あるいは実験を経て裏づけのされた命題などとして定義することができるからである。こうすると、私たちには限られた数の命題しか手に入らない。それゆえ、私たちが入手しうるあらゆる命題は、言語によって定式化されうる可能的対象としては世界3に存在しているが、人間精神によって最初の矛盾が産出されたときにすでに知識として存在していたということにはならない。

ここまでの流れを要約しておこう。世界3を世界1に還元しようとする議論に欠けているのは物理的対象のかたちで具体化ないし保存されている可知的対象への視点であり、世界3を世界2に還元しようとする議論に欠けているのは心的過程と可知的対象の峻別であった。しかし、可知的対象もまた思考過程の一部であることに変わりはない。それゆえ、可知的対象も世界2に属するのではないかという批判があるが、可知的対象は、心的なものでありながら同時に客観的なものでもあるという点において、たんなる心的過程とは一線を画するものであるため、自律的なものとして世界3に属すると考えられなければならない。ポパーによると、世界3の自律性を考えるうえで、世界3.3の概念は重要である。世界3.3の存在者は、私たちの発明の意図されざる結果として自律的に産出される。そのような意味で、ポパーは世界3の自律性を主張した。しかし、もしそうだとすると、私たちが入手しうるあらゆる知識は世界3においてずっと以前からすでに存在していたことになるのではないだろうか。たとえば、プトレマイオスの宇宙論が提出されたとき、その否定としてアインシュタインの宇宙論は当時からすでに存在していたということになるのではないか。ところが、ニーニルオトによると、世界3とはある言語における可能的なあらゆる文の集合であるという意味で自律的であるにすぎない。そのなかでもとくに私たちによって確かめられた命題のことを知識と定義するならば、非統一的な世界3が問題となることはない。

(3) 筆者の主張

ところで、ニーニルオトが世界3の自律性にかんするポパーの議論を言語の観点から擁護したのはなぜだろうか。その理由のひとつとして、ポパーが世界3の考察において言語の重要性を強調していたということが挙げられる。ポパーによると、世界3に属するあらゆる命題や理論、議論などはすべて言語によって定式化されうる。それゆえ、それらはたとえ誰によっても産出されなかったり、理解されなかったりしたとしても、それでも依然として誰か

によって把握されうるような可知的対象として世界3に属することができる (Niiniluoto 2006: 65; Popper 1972: 116, 137)。これは、言語が世界3に属しているということを意味している。しかし、この点について、ポパーの三世界論には概念的な混乱があるのではないかと指摘されることがある。

たとえば、クレムケ (Klemke 1979) によると、世界3とその存在者にかんする概念は調和しない。ポパーにしたがえば、世界3は論理内容の世界であるにもかかわらず、それと同時に言語によって定式化された理論や推測、問題、議論、書物などの世界でもまたある (Popper 1972: 74, 107)。それゆえ、ポパーの説明にしたがうと、たとえば書物について考えるとき、私たちは書物の論理内容と書物それ自体はどちらも世界3に属すると考えなければならない。

しかし、書物の論理内容は書物それ自体と同じ水準において分類されたり同定されたりすることができるようなものではない。たとえば、人類が滅亡したあとの状況を想像してみよう。それでも、ある文明化された私たちの後継者によっていくつかの書物が発見されるならば、それらは解釈されることだろう (Popper 1972: 116)。ところで、このように書物が把握されたり理解されたりするというのは、その書物の文章によって伝達されている論理内容が解釈されているということにほかならない。したがって、書物が解釈されるのはその論理内容によるのであって、それを表現する手段としての言語や書物それ自体によるのではない。それにもかかわらず、ポパーは世界1と世界3の両方に属するようなものとして、たとえば書物のような対象の存在を示唆した (Popper 1974: 1050-2; 1977: 41-3)。それゆえ、そのようなポパーの主張には問題がある。

そこで、クレムケは言語的要素 (linguistic component) に言及することによって世界4を導入する。クレムケによると、世界1には特殊領域があり、物理的対象のなかでも言語的要素を含んでいるものがこの領域の存在者であるとみなされる。それらは解釈される傾向性を有しているがゆえに認識内容を表現したり、世界1における他の存在者とのあいだに指示関係を構築したりすることができる。それゆえ、世界3に属することができるのは人間精神の産物ではない純粋な論理内容のみであり、その論理内容がひとたび言語によって定式化されるならば、したがってたとえばたんなる言語的実体としての理論や議論、ひいては物理的な書物などのかたちをとって具現化されるならば、それは世界4の存在者であるとみなされることとなる。

たしかに、言語ないし言語的要素を含むあらゆる存在者を世界4に分類するクレムケの指摘はもっともなものであるようにみえる。しかし、本当にそ

のような混乱がポパーの三世界論にはあったのだろうか。ポパーは「もろもろの理論、命題、言明は、もっとも重要な世界3の言語的実体である」(Popper 1972: 157)と述べ、言語は、世界1と世界2のみならず、世界3にも属するということを明言している。それどころか、ポパーは世界3について「言語の世界 (world of language)」や「言語的世界3 (linguistic third world)」などのように、あえて言語の世界であることを強調するような表現を用いることさえある (Popper 1972: 118, 120, 148) vii。つまり、クレムケの主張とは異なり、概念的な混乱があったからではなく、明確な意図によってポパーは言語を世界3の対象とみなしているのである。そうすると、ポパーの三世界論においては、言語はむしろ世界3の存在者でなければならない。

(4) 今後の展望

ポパーは問題や理論、批判的議論の世界を世界3の特殊ケース、狭義の世界3、世界3の論理的または知的領域であるとみなしている (Popper 1992: 187)。このことから、クレムケが世界3を論理内容の世界であると結論したのに対して、ポパーはあくまで論理内容は世界3の一部にすぎないと考えていたということがわかる。しかし、そこでポパーはなぜ言語を世界3の存在者に加えたのだろうか。たとえ論理内容は世界3の一部にすぎないとしても、それはすなわち言語が世界3に分類されるということを意味しているわけではない。ポパーは、いかにして世界3の自律性と世界3における言語的実体の存在を調停したのだろうか。三世界論における言語の重要性はポパーが繰り返し主張しているところではあるものの、言語が世界3の対象としての地位を獲得するまでの経緯については改めて詳しく見直される必要がある。

i 認識主体なき認識論の不可能性については、Bunge (1981) においても、進化論的認識論の観点からの議論が確認できる。

ii ジェームズ (James 1981) のように、思考過程の内部における区別の存在は認めるものの、それでもなお可知的対象の自律的な世界については心理学的観点から否定しようとするような議論もある。

iii そのような理論や問題は、たとえ意識的には捕捉されていなくても、直観的には世界2によって関心が寄せられうる。しかし、それはあくまで私たちが自律的な世界3.3における問題の探求へと駆り立てる要因にすぎない (Popper 1974: 1052)。世界2によって世界3.3へと直観的な関心が向けられている状態は、世界2において世界3の対象が把握されたり理解されたりしている状態とは区別されるので、世界2によって直観されているのみの対象は依然として世界3.3に分類される。Popper (1977) p. 43 ff.も合わせて参照されたい。

iv 本稿では「存在者」という語によって統一するが、これは実際にポパーが用いている表現ではない。ポパーは世界3の対象を住人 (inmate) や市民

(citizen)、居住者 (inhabitant) などの語によって表現する。また、世界 3 に言明を住まわせる (people) というような表現も認められる。三世界論において「住まわせる」という語には少なくとも 2 種類のもので用いられており、筆者の知るかぎりでは、もう一方の住まわせる (inhabit) という語は、ポパーによってはアイデアや精神に対してのみ用いられるが、ポパー研究においては世界 3 の対象にも適用されることがあるので注意されたい (Popper 1972: 107, 123, 126, 138; 1992: 182; e.g. Gilroy 1985: 187)。

v ポパーによると、世界 3 における発見はその証明とは関係がない。ただ既存の概念などに対して直観的に疑念を抱いたり、あるいは違和感を覚えたりするのみで十分である (Popper 1994: 35)。

vi ここで意図される言語はよく定義された形式言語であり、自然言語によっては充足されえないある理想的状況が想定されている (Niiniluoto 2006: 64)。

vii ポパーは 1970 年ごろを境にエックレスにしたがって世界の呼び方を変更している (Popper 1972: vii; 1992: 181)。本稿では変更後の呼称を採用しているため、統一性のために third world は「世界 3」と訳している。

(5) 参考文献

Boyd, B. 2016. 'Popper's World 3: Origins, Progress, and Import', *Philosophy of the Social Science* 46(3): 221–41.

Bunge, M. 1981. *Scientific Materialism*, London, England: D. Reidel.

Cohen, J. 1980. 'Some comments on Third World Epistemology', *British Journal for the Philosophy of Science* 31(2): 175–80.

Gadonne, V. 2016. 'Is Popper's Third World Autonomous?', *Philosophy of the Social Science* 46(3): 288–303.

Gilroy, J. D. 1985. 'A Critique of Popper's World 3 Theory', *The Modern Schoolman* 62(3): 185–200.

James, W. 1981. *The Principles of Psychology, Vol. I*, Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press.

Klemke, E. D. 1979. 'Karl Popper, Objective Knowledge, and the Third world', *Philosophia* 9(1): 45–62.

Niiniluoto, I. 2006. 'World3: A Critical Defence', *Karl Popper: A Centenary Assessment, Vol. II: Metaphysics and Epistemology*, ed. I. Jarvie, K. Melford, and D. Miller, pp. 59–69, Aldershot: Ashgate.

O'Hear, A. 1980. *Karl Popper*, London, Boston and Henley: Routledge & Kegan Paul.

Parusniková, Z. 2016. 'The Devaluation of the Subject in Popper's Theory of World 3', *Philosophy of the Social Science* 46(3): 304–17.

Popper, K. 1963. *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific*

Knowledge, New York: Basic Books. (『推測と反駁』、藤本隆志・石垣壽郎・森博訳、法政大学出版局、1980年)。

Popper, K. 1972. *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, The University Press. (『客観的知識—進化論的アプローチ』、森博訳、木鐸社、1972年)。

Popper, K. 1974. 'Replies to My Critics', *The philosophy of Karl Popper*, ed. P. A. Schilpp, pp. 961–1197, La Salle, Illinois: The Open Court.

Popper, K. 1992. *Unended Quest: An Intellectual Autobiography*, London: Routledge. (『果てしなき探求—知的自伝』、森博訳、岩波書店、1978年)。

Popper, K. 1994. *Knowledge and the Body-Mind Problem: In Defence of Interaction*, ed. M. A. Notturmo, Routledge.

Popper, K. & Eccles, J. C. 1977. *The Self and Its Brain*, Springer International. (『自我と脳 (上・下)』、西脇与作・大村裕訳、思索社、1986年)。

(大阪大学)